

# 小樽高商の第2期

倉 田 稔

## 目 次

はじめに

- 1 摂政宮の来樽
- 2 徴兵
- 3 小樽
- 4 女子との関係
- 5 生徒一般
- 6 時代の中の高商
- 7 伊藤 整
- 8 大熊信行
- 9 友人たち

## はじめに

本稿をもって、さしあたり計画していた小林多喜二伝記の、第1部および第2部を終了する。第1部と第2部という区分は、ここでは仮のものである。

第1部は、次のように読んで頂きたい。

- 1 「小林多喜二伝 —— 多喜二と小樽 ——。小樽移住から小学校卒業まで」  
(小樽商科大学『人文研究』第86しゅう1993年8月)
- 2 「小林多喜二伝 —— 多喜二，庁商へ ——。小学校時代から，庁商時代の前半」(『人文研究』第87しゅう1994年3月)
- 3 「小林多喜二伝 —— 小林多喜二と小樽 ——。庁商の時代，後半」(『人文研究』第88しゅう1994年8月)

第2部は、順序が違って申し訳けないが、次のように読んで頂きたい。

- 4 「小樽高等商業学校と渡辺龍聖初代校長」(『商学討究』第44巻第4号。1994年3月)
- 5 「小樽高商入学の小林多喜二」(『商学討究』第45巻第3号。1995年1月)
- 6 「小樽高商の先生たち」(『商学討究』第45巻第1号 1994年8月)
- 7 「小樽高商の第1期」(『商学討究』第46巻第1号 1995年8月)
- 8 本稿
- 9 「小林多喜二の小樽高商卒業」(『商学討究』第45巻第4号1995年3月)

## 1 摂政宮の来樽

小林多喜二が第二学年になった時、1922(大正11)年に、皇太子・摂政宮(せっしょうのみや)・裕仁(ひろひと)が、小樽高商を訪れた。そう言えば、明治44年(1911年)に、高商が開校する年の8月、当時の皇太子つまり後の大正天皇が高商を訪れたことがある。小林多喜二の後の好敵手、昭和天皇について少し論じておこう。現代日本史で最も重要な存在あるいは人物が、昭和天皇である。この人の思想と強力な政治的役割を見ておかないと、日本現代史が分からなくなる。

皇太子裕仁親王は、1901年(明治34年)、当時の皇太子嘉仁(よしひと)親王の第一子として生まれた。彼は成長し、1908(明治41)年、学習院初等科に入学する。学習院初等科は小学校であり、その院長としては、軍神と言われた乃木希典<sup>1)</sup>が、わざわざ任命された。そこでは彼は、質実剛健で育てられ

---

1) 乃木希典(まれすけ)、1849~1912。長州出身。戊辰戦争に出る。西南戦争で、戦旗を失い、自決しようとした。日清戦争にも出征した。1896年、第3代台湾総督になるが、行政能力なく、同年辞任した。日露戦争で旅順攻撃ができず、更迭される。軍事参謀長になる。日露戦争の休戦で、ロシアのステッセル將軍と乃木大将とが交渉し、和議がなったということで、乃木さんがあたかも日露戦争に勝った代表的將軍とみなされ、乃木は国民の人気が出た。そして軍神といわれるようになった。しかし軍人としては無能だった。1907年に、学習院長になる。1912年、明治天皇が亡くなると、妻と共に自決した。

た。裕仁は少年時代から知力にはすぐれていた。

1912年（明治45年＝大正1年）に明治天皇が死に、嘉仁親王が天皇となり、年号は大正とされ、裕仁親王は皇太子になった。同時に陸軍少尉・海軍少尉になった。学習院初等科を1914年に卒業した裕仁は、御学問所に入り、帝王学（＝倫理）その他の教育を受けた。軍事学が特別に重視された。将来の大元帥となるからである。卒業とともに陸海軍中尉になった。彼は祖父や父に較べ、しっかり教育を受けた。そしてかなり優秀な学生だった。後年、軍事に非常に詳しくなった。第2次大戦中、教えた陸軍大学校の教官も冷汗をかくほどだった。また上奏（天皇に報告すること）のさいには、軍事知識があるので、上奏する人は大変緊張した。

彼は少年の時から、「ロマンティックな好戦的人物」であった。そして自分のことを天照大神の子孫であると信じ込んでいた。死ぬまでそうであった。もちろん戦前の日本人もそう信じていたわけである。1916（大正5）年に、彼は陸軍大尉になった。

1921年（大正10年）3月から、皇太子は半年間のヨーロッパ旅行に出発した。その時、陸軍少佐になった。イギリスでは演説を大音声で行い、評判を高めた。この人は実はきわめて精力的な人であった。

彼は帰国して同年11月に、摂政に就任した。同時に陸軍中佐になった。大正天皇は、幼児に脳膜炎を患い、その後、多くの大病をした。実際は神経が集中できなくなり、長い朗読も出来ないのであった。つまり天皇としての勤めが出来なくなった。大正天皇が勅語を巻いて遠眼鏡の様にした事件が、噂として全国に流れていた。こうして実際の天皇の仕事は、摂政としての皇太子に任されたのである。皇太子は英明であると宣伝され、国民も期待した。英明であるかどうかは別として、彼はある意味で有能であった。なにしろ、後年、第2次世界大戦を日本の最高指導者として軍事的に指導したのであるから、彼の力量は軽視できないのである。

敗戦後、天皇制を温存するために、裕仁天皇が戦争指導ではロボットであったという伝説が作られた。しかし「神聖にして冒すべからず」（明治憲法第三

条)とされ、政治的には絶対権力を握っていた天皇が、戦争の最高指導者であって、これを否定する人は天皇の力量を侮辱することになる。それに戦前は、天皇の意志には全く逆らえなかった。

彼は、自分と国家を一体のものを見た。そして自分が国家の脳髓であり、臣下は自分の手足だと、考えた。朕の股肱——手足という意味——の臣、という発言が、それを示している。その彼の思想は、個人主義反対、欧米の自由主義・民主主義反対であり、天照大神以来の天皇家の強化・拡大を旨とし、日本つまり天皇家によるアジアの支配が、生涯の理想であった。その考えを祖父明治天皇からも受け継いでいた。<sup>2)</sup>

さてこの摂政宮殿下が全国を行幸することになった。皇太子ヒロヒトは、北海道の人情・風俗その他を見学するため、1922(大正11)年7月6日に函館に着き、各地を巡遊しながら、11日に小樽に着き、小樽高商を見学した。

彼は午後一時、小樽の公会堂<sup>3)</sup>を出た。随員などが三〇両の車で従った。元小樽商業会議所跡、稲穂小学校前を通過して、高商へ向かった。当時の地獄坂は、右側の山腹から正面の塩谷山道一面に、北海道特有のエゾ松が生い茂っていた。

摂政の宮は高商正面を通ったが、正面左側沿道には、教授・学生が列をなして迎えた。お召し自動車は、校内の坂を登って玄関にとまった。中村和之雄教授が、校長代理として迎え、摂政宮は仮講堂で休んだ。ここはかつて大正天皇も休息した所だった。皇太子は、高商中を見学し、市内各中学校長も出迎えた。見学は1時間足らずであった。この時、伴校長の姿が見えないのは興味深い。小樽市民と高商の関係者は、大歓迎をした。殿下親臨の際、親しく学生の野試合をご覧になったのも高商の玄関上のバルコニーからだった。<sup>4)</sup>

1890(明治23)年に出された教育勅語以来、日本では天皇＝神様論が全国で強力に教え込まれていた。小学校は教育勅語を暗記する機関とされていた。

2) バーガミニ『天皇の陰謀』全7巻 現代書林。

3) 当時は、公会堂は、今の市民会館の場所にあった。建物が後に移転した。

4) 西川『ひとすじの道』1973年。

天皇陛下の白馬のフンを有難く持ち帰ったり、天皇の入った風呂の湯を飲みたいと思う国民もいた。7月23日、裕仁は室蘭から軍艦で帰った。<sup>5)</sup> 摂政の宮は、天皇になってからも、昭和11年（1936年）に再び小樽を訪れることになる。

この高商訪問にときに、小林多喜二も歓迎に動員されて、日の丸の小旗を振る群集の中にいたであろう。皇太子の顔もチラッと見えたはずである。多喜二は、まさか彼が将来の好敵手になるとは、思いもしなかつただろう。なぜなら彼は普通の学生であった。彼に殺されるとは夢にも思えなかつたであろう。

また皇族の行幸では、どこでもそうだが、高商生は身体検査を受け、検便をさせられた。だから、有難迷惑だったという声もあった。

その後の摂政の宮について、触れておこう。1923（大正12）年に、つまり小樽訪問の翌年、虎ノ門事件が起きた。難波大助が仕込杖銃で摂政の宮を撃った事件である。裕仁はこれに対して堂々たる反応をしている。だから、この人は神経の弱い人ではないことが、ここから分かる。1926年（大正15年・昭和元年）12月、大正天皇が亡くなり、昭和となった。裕仁が天皇となり、1927（昭和2）年に即位の大礼が行われた。1931（昭和6）年に、「満州事変」が起きた。これは、日本軍国主義の中国侵略の本格的な始まりである。<sup>6)</sup> 裕仁天皇はこれを聞いて、「仕方がなし」と言っている。彼は、これが関東軍——在中國日本軍——の謀略であることに気が付いていた。

1935年（昭和10年）に、天皇機関説事件が起きた。日本を法人と見、天皇を機関と見る、美濃部達吉東大教授の説である。これに対して天皇は、「日本のような君・国同一の国ならばどうでもいいじゃないか。」と、見事な発言をした。同12月に、日本はワシントン条約を廃棄した。これは、1921（大正10）年12月のワシントン会議で決まった軍縮条約である。この軍部のワシントン体制打破路線に、天皇は同調した。

5) 『小樽商科大学史』財界評論新社 1976年。

6) 第2次世界大戦は、1939年に始まったとされる。つまりヒトラーのポーランド侵略である。だがそれはヨーロッパ的観念である。アジア的視点からは、第2次大戦は、この1931年から始まっている。

1936（昭和11）年に、二・二六（にいにいろく）<sup>7)</sup>事件が起きた。青年将校（主に尉官クラス）の天皇絶対ファシスト的クーデタだった。彼らは北進（ソ連攻撃）論を持っていた。北一輝思想（『日本改造法案』）に少し影響されていた。この高官襲撃事件の結果は、こうである。岡田首相は死ななかつた。高橋蔵相は殺された。齊藤内大臣、鈴木侍従長、牧野前内大臣も死ななかつた。渡辺教育総監が殺された。天皇は、その青年将校を「あの気の狂った暴徒ども……」と言い、「朕が股肱の老臣を殺りくす……」と怒った。彼は、軍部がなかなか鎮圧しないのを見て、「朕自ら近衛師団を率い、これが鎮定にあたらん」と叫んだ。これをきっかけに鎮圧が進んだ。この事件以後、天皇は、政治に・軍事に自信を持つようになったのである。

## 2 徴兵

日本の徴兵制は、3つの時期に分けられる。1873（明治6）年に徴兵令ができた。1889（明治22）年に、その徴兵令が大改革された。新徴兵令である。1927（昭和2）年に兵役法ができた。小林多喜二は、それゆえ第2の時代にかかわる。第2の時代に国民皆兵の原則が成立した。ただし1年志願制があつて、それは、中等学校以上の卒業者、かつ満26歳以下（1893（明治26）年には28歳以下になる）の者に認められた。こうして兵役を1年で済ませることもできた。

徴兵の北海道への適用は1896年（明治29年）だったので、それ以前は本籍地を北海道に移して徴兵を逃れる例があつた。夏目漱石が岩内へ籍を移したのは有名な例である。一方、1882年（明治15年）には軍人勅諭が出され、絶対服従の精神がたたき込まれ始めた。<sup>8)</sup>

当時、徴兵検査があつた。明治22年（1889年）に、徴兵検査制度が確立し

7) 当時の人々は、必ず「にいにいろく」と言う。最近の若い研者は「ニイテンニイロク」と言うが、我々にはピンと来ない。

8) 大江志乃夫『徴兵制』岩波新書。

ていた。昭和2年（1927年）4月に、徴兵令は兵役法となった。20才になった日本人男子はすべて、この徴兵検査を受けねばならなかった。出身地で体格検査をするのである<sup>9)</sup>。これによって、甲乙丙丁戊と等級がつけられた。身長が155cm以上、視力0.6以上、胸周りが身長半分の、というのが甲種であり、1927年（昭和2年）からは152cm以上、0.3以上となった。視力と肺病が注意された。ふんどし1本の裸で、全て見せた。親にも見せないところまで見せた。「前近代的な制度で」（大津）あった。乙種は、一、二、三種があり、甲種と第一種乙とが、現役として翌年入隊した。第二種乙と第三種乙は、予備役となった。これらは、召集を受けると、入隊することになる。つまり3カ月の在学中の入隊である、または1年志願すると卒業まで延期された。

ところが1年志願制は、前述の徴兵令が兵役法と改められた時点で、全廃された。したがって学生への特権＝優遇は制限されることになった。しかしなお将校への道はひらかれることになった。それは幹部候補生制度の新設である。

学生の特権として、徴兵は（適令をむかえても）、兵役法第41条によって、卒業まで延期することができた。在学中の適令該当者は、毎年、在学中の学校長を經由して所轄の連隊区司令官に「徴兵猶予の延期届」の提出の労を義務づけられていた。それを怠ると在学中でも、検査－入隊しなければならなかった。<sup>10)</sup> 1年志願をしなければ、在学中でも入隊しなければならなかった。だから在学中に3カ月入隊する人もいた。<sup>11)</sup>

多喜二の徴兵については、はっきりしない。しかしもちろん彼は徴兵検査を受けた。秋田で受けたのではないか。だが背が低く躰も小さいので、多分、甲種合格ではなく、丙種ぐらいで、兵士としては失格となったのではないか。ちなみに彼は身長が154cmであった。

---

9) 小樽では少なくとも太平洋戦争のころ、公民館で検査された。

10) 以上の事を全て捨象して行われたのが、後のいわゆる学徒出陣である。昭和18年（1943年）9月21日の特例による措置、つまり「在学徴集延期臨時特例」が閣議決定され、徴兵猶予は全面停止された。3回の繰上げ卒業に引き続く措置として、昭和18年12月に全国一斉に該当者は検査・入隊となった。

11) 『坂の道』卒業50週 {ママ} 年記念論文集 —— 緑丘大正12年会。

延期特例は、最高27才までの猶予があった。徴兵検査を受けなくてもよいものである。高商では25才までの猶予があった。希望者は願いを出し、それに校長が判を押す必要があった。出生地の連隊区へ届けるのであった。<sup>12)</sup>

学生・那珂 捷（昭和2年（1927年）卒）は書く。「なにしろそのころは、在学中に出身地で徴兵検査を受けるのだが、その時には、万一にも採用されては大変、大体十日ぐらい前から毎日醤油を一合づつ呑み、——これで躰がやせ細る——連夜深酒を無理にも呑んで、半ば徹夜を重ねる。その挙げ句に、検査当日はそうこうして検査場へ出向く。すると検査官は、『ウン、まあ安心なさい。君は丙種だよ』と、印を押してくれた。これで一年志願の必要もない」。<sup>13)</sup>（句読点を加えた）

### 3 小 樽

当時の小樽の状況について、田中先生は書く。「通称ドン山という高商の裏山から正午のドンが鳴っていた。当時の環境は万事がのどかで、自然環境が豊富で詩情を駆り立てるものに満ちていた。往来ではラオ（煙管）の修繕屋が叫んであるいたり、季節の物売りが威勢よく遠ざかってゆく。5月の節句になると、熊笹を刈ってきてベコ餅を作り、重箱に入れて隣近所に配る。近所からも色や味も格別なベコ餅を貰って、隣のベコ餅はうまいなどと言いついていた」。<sup>14)</sup>

当時は人力車の時代だった。大正11年（1922年）、旭川丸井の呉服店と洋物店が合併し、百貨店として開業し、小樽支店も函館とともに新館落成のうえ、百貨店として開業した。

伊藤整は言う。「小樽は一口にいえば明治の匂が残っている古びた町」であ

12) この項目、大津博士氏に教わる。

13) 「小樽夜景」（『緑丘』No.63）

14) 田中孝「倫理と仏教」（『緑陵論集』第13号、昭和44年、2ページ）

田中氏は当時開運町に住んでいた。



り、「北海道と云う所にしては小樽は珍しく明るい南国的印象を与える」。「明治時代には、小樽は港町として大をなしていたのに、札幌は原始林の中の急造の植民村に過ぎなかった。ニシン漁業の中心地で、またカラフトやウラジオストックとの接触を保っていた小樽の人間は、漁業、貿易、商業において、積極的な、また向こう見ずな、抜け目のない性格を持っていた。」<sup>15)</sup>

小樽港一杯を船がうめつくしていた。小樽区は全盛時代で、鯊の香りが港に満ち満ちていた。町に鉄道の踏切があった<sup>16)</sup>。今の「すし屋通り」である。港も網にひかれた鯊の白子で港の水の色も白く見えた。防波堤で手網で鯊をすくいあげた学生もいた。<sup>17)</sup> 多喜二が1年のとき、庁立小樽商業が焼けた。

高商生がよく行ったのは、サッポロ直営バー、またはビアホールで、公園通りにあり、このビア・ホールを「直営」と略称した。高橋バーもあった、または高橋ビアホールであり、一パイ一五銭の生ビールだった。黒ビールもあった。そこは公園通りの角にあり、その後、日本生命小樽支店（現在、教育委員会がある。花園町。）になった。高橋ビヤホールは住友生命の角にあったという説もある。ここは、小樽のビヤホールの元祖で、高商生が出入りし、一杯十銭そこそこでラッパ型コップを傾けた。

当時小樽の歓楽街は、妙見川を中心にして公園通り、稲穂町辺に形成されていた。妙見川は花街であった。妙見川の高島橋は、大正11年8月の架設（松田）である。妙見川畔に、すきやき亭「米久」があった。「蛇の目」寿司があった。蛇の目すしは、大衆料理屋で、「元来が「寿司」が看板だったが、和食でこい、洋食でこい、ここへ来ると、大抵の料理が落ち着いた雰囲気の中で食べられた。」<sup>18)</sup> 赤いたすきの女中が給仕した。

第一花園大通りに、左文字書店があった。左文字万造さんが左文字書店にいた。公園の上に、「桃太郎だんご」があった。花園町の「赤のれん」の浪ちゃ

15) 『伊藤整全集』新潮社 第24巻300ページ。

16) その後、高架になり、その後、道路にかかる部分が撤去された。

17) 小沼「回想の小樽」(『坂の道』) 27ページ。

18) 清水「思い出すままに」(『坂の道』) 58ページ。

んという女性がかわいくて、多喜二の組でよく話題にのぼった。第二花園大通りに、工藤古本店があった。その後、第一花園大通りに移った。第二花園大通りに、古本屋「文屋」があった。錦座、公園館、中央座、電気館などの活動写真があった。

当時、双子姉妹で有名な秋山弁護士の令嬢や、山田順子が話題になった。

つまり、整の在学中だったが、後者はくわしく言えばこうだ。増川才吉は、大正9年、ユキという美しい妻を得、小樽で弁護士を開業した。女の子が2人できた。市役所通りに住居兼事務書を構えた。ゆきは秋田県出身で、高女を出て、上京し、増川と知り合ったのだった。目のパッチリした秋田美人であった。小樽でユキは、文学にかぶれ、子どもを乳母にまかせ、家庭を顧みず、小説を乱読し、作家希望となった。駅通り「北海ホテル」<sup>19)</sup>の一室を借り切り、籠って、長編小説「流るるままに」を執筆中との新聞ニュースが、でかでかと伝えられた。<sup>20)</sup>その後、彼女は夫や子を残し、家を飛び出し、原稿をもって上京した。

東京の徳田秋声のもとへ走り、山田順子の名で弟子入りし、同棲の話題を蒔いた。増川代議士とは離婚した。ある出版社の社長と肉体関係をもった代わりに、小説を出版してもらった。ペンネームは山田順子である。その後、竹下夢二などと浮名を流した。多くの男性や徳田秋声と同棲した。結局彼女は小説家としては成功しなかった。<sup>21)</sup>

越崎宗一は、昭和5年(1930年)上京の折り、銀座裏のあるバーで、真っ赤な洋装の順子の酔っぱらい姿をみて、幻滅を感じた。後に上京した小林多喜二も、ここに一度行ったことがある。順子は、すでに有名になった多喜二に会いたいと言っていた。多喜二はそのバーで、越崎と同じように感じた。

万城目正(当時は侃)<sup>22)</sup>が小樽にいた。後に有名な流行曲作曲家になる人

19) 大正7年(1918年)に、純洋式「北海屋ホテル」として設立、大正10年(1921年)に「北海ホテル」となる。

20) 『小樽新聞』のマイクロ・フィルムによれば、大正14年11月15日に、「流るるままに恋の順子さん(下)」がある。(上)は欠面。

21) 順子について、夏堀正元『小樽の反逆』(岩波書店)にも少し記述がある。

22) 万城目。1905~1968。空知に生まれる。作品に、『旅の夜風』『純情二重奏』など。戦後には、『リンゴの唄』『悲しき口笛』『越後獅子の歌』『この世の花』がある。

であり、「愛染かつら」などで大ヒットする。多喜二の上級生で彼の所に遊びに行っていた人がいた。

毎年6月の初めになると、小樽の公園通りの夜店に、鈴蘭の花が出始める。昭和3年(1928年)の「小樽市大通(花園町)服装調査」によれば、公園通りは、いろいろな露店があった。西瓜一五軒、味瓜<sup>23)</sup>、おやき<sup>24)</sup>、やききび<sup>25)</sup>、ゲタ、メリヤス<sup>26)</sup>、歯ブラシの日用品の店、などであり、計102軒あった。夏には、藪鶯が鳴いていた。女学生は和服に袴姿だった。今の商大通りは、昔は高商通りといった。

#### 4 女子との関係

多喜二の同学年生の奥野と石川が、三年生の春に、樽前山<sup>27)</sup>の登山に行った。たまたま修学旅行の小樽庁立高女の三年生と、登別温泉で泊まり合わせた。両君は、いたづら半分、女学校の先生然として、高女生の中央に座って写真を撮った。それが女学校で問題になり、高商側は否認していたが、二人の写真をつきつけられて抗弁の余地がなくなった。両君は7月末から9月初めまで、夏休み中、停学処分となった。

これを、級友の野界は後に、「大岡裁判を思わせる情のこもった処置であった」<sup>28)</sup>と書く。夏休み中の停学なので、2人にとっては痛くはない処置であったからである。だが、高女側がこのような小さな事を問題とし、抗議し、高商側も何等かの処罰をしなければならなかったことが、当時の時代を物語っている。

高商の北斗寮の数名が、軽川に鈴蘭取りに行った。その帰途、列車内で、高

23) 関東地方でいう、まくわうり。

24) 東京では、太鼓焼き、今川焼き。

25) 焼いたトウモロコシ。

26) 毛糸、綿糸で、機械で編んだ織物。

27) たるまえざん。支忽湖の南側の山。

28) 『文集』11ページ。

商2年生の中村治四郎が、双子姉妹で有名であった秋山弁護士の令嬢に、風呂敷を貸した。後で令嬢が風呂敷を返しに来て、寮でカルタやトランプをして、夕方まで賑やかに遊んで帰った。高商は、普通は女人禁制なのである。

これを硬派の寮生が騒ぎ立て、温厚な寺田舎監（先生）も、これをやむをえず謹慎処分にした。これを、野界は、「男女共学の今日から見れば、両事件とも他愛のない事柄であったのに、時代の相違は驚くの外ない」と書く。

## 5 生徒一般

本州からきた生徒は、津軽海峡を田村丸で渡った。列車できて、中央小樽駅（今の小樽駅）へおりた新入生は、学校からの回示によって、駅長室を訪れ、所属の寮を聞かされる。親切に助役が名簿をくくる。上級生がきて、寮へ案内する。入学時、まだ鉛色の冬空が低く垂れ込め、緑町や地獄坂も、一面の残雪とドロコノ雪解け道である。

寮は、8畳に3人とか、6畳1室とかであった。数日後、新入生の歓迎会が行われる。その夜、歓迎ストームがある。すなわち、新入生が寝ついたころ、廊下のアチコチから、にわかにジャンガジャンガと鳴動が起こる。太鼓やバケツの音である。人が部屋に入ってくる。ひどいのは、部屋の板戸がひっくり返され、廊下は水だらけとなり、布団の上に石炭や炭ガラがばらまかれる、というものもある。このストームに対して、返礼ストームをした学年もある。<sup>29)</sup>

北斗寮舎監は寺田貞次先生、文行寮舎監は中村賢二郎先生で、そこにはピンポン台やオルガンがあった。玉の井寮舎監は、小尾範治先生である。寮には賄い人がいた。献立を、賄い委員が計画した。寮生は、かかった食費を払うのである。寮祭があった。寮の一つ、第四寮分舎が、教師の宿舎になった。そのため学生が追い出された。寮を出て下宿する人もいた。椎名先生は学生のように下宿していた。

29)「坂の道」卒業50週（ママ）年記念論文集——緑丘大正12年会。

高商の入口の横に新聞閲覧室があった。校庭に八重桜が植えられていた。図書館からは、港の灯が見えた。剣道部、柔道部や、野球部、庭球部があり、蹴球・スキー・スケートが一つの部であった。恒例として4月に学生活動の各部の事業と予算を決定する委員会が開かれる。野球部、庭球部は、年間予算が各2, 3百円あった。大正11年(1922年)にスキー部が独立し、陸上競技部も新設された。高橋次郎が、スキーで、また陸上競技部でも活動した。高橋は、「大東亞共栄圏」(『経済理論』昭和19年(1944年)6月20日)が原因で、昭和23年(1948年)に教職追放となった。昭和27年(1952年)に死んだ。

当時のスキーは、普通の皮ぐつに、アルパインの金具をしめ、単杖である。スキーに石ローを塗り、2箇所荒縄を結び付け滑り止めにする、というものだった。民間団体として小樽スキー倶楽部があり、それが主催して、大正12年2月10, 11日に、第1回全国スキー大会が庁商の前庭で行われた。ジャンプは、高商のジャンパー、讃岐梅二<sup>30)</sup>が、16m余で栄冠をかちえた。

治安その他の理由から中絶されていた満鮮旅行が、多喜二の2年の時から再開された。<sup>31)</sup>

高商の学生は、町の人たちからエリート族のように思われていた。一方、肋膜炎、結核、死は、学生の亡くなるコースだった。学校で、「休学」の掲示が貼り出されると、やがて追いかけるように、「死亡」の掲示が出た。

小尾教授は、最終講義で、「人生の目的は活動にあり」と言い、大西は、「人間ほど面白いものはない」と語った。浜林は、「中学一年の英語を完全にマスターできれば、大学の先生にでもなれる」と言ったことを、ある学生は思い出す<sup>32)</sup>。西尾先生は、習字を教えた。

宇治山田商業学校から、わざわざ遠い小樽高商に、大正12年(1923年)に、西川正巳(明治38年~昭和47年)が入学した。つまり多喜二が3年の時である。「小樽は日本一道路の悪いところや」と聞いてきた。「当時の小樽高等商業学

---

30) 卒業して、北海道炭鉱汽船に入社し、その取締役営業部長になった。昭和39年に死。

31) 『坂の道』

32) 西川正巳『ひとすじの道』1973年、19ページ。

校には、非常に明るい自由な空気が漲っていた。」<sup>33)</sup> 外人教師のラウンズさんが、初めての授業に教室に入ってきて、「グッド・モーニング、ジェントルメン」と挨拶されて、西川は大人になった喜びと、驚きを感じた。

西川が1年生の時、経済原論の大熊信行が、膨大な Mill の Principles of Political Economy (ミルの『経済学原理』)<sup>34)</sup> を講じられるとき、真先に、「君達のうち唯物論と唯物史観について知識ある者は手を挙げてみよ」といい、4, 5人が手を挙げたので驚いた。市公会堂での高商の講演会で、今(ママ、金が正しい)井健四郎が、石川啄木の歌「一隊の兵を見送りて かなしかり 何ぞ彼等のうれひ無げなる」をひいて、さかんに軍隊批判をするのにも、西川は驚いた。西川は、激しい思想の波の吹きあれているのを身にしみて感じる思いがした。西川が1年生のとき、稲穂小学校の講堂で牧野英一博士が講演されたことがあった。牧野博士は、その当時における最も進歩的な法律学者であった。

小樽高商は、当時の学生の思い出によると、大変立派に描かれている。

多喜二の同学年卒業生の徳橋はいう。「三年間われわれは全人間的に高められた。よい学校に入った感謝感激は、言い尽くせない。」同じく伊部は言う。高商時代のメリットは、人格の形成に大変役立ったことだ。小樽における3か年の高商生活は、一生において最も有意義であり、終生忘れ得ぬなつかしい追憶に満ちた年月であった。しかしある教授は、ある本を一言一句同じに講義した。そこである学生は、それを怒った、こともある。「x教授のx科目講義に失望と言ふより義憤を覚えた。講義が始まって何回目かにひょっと之は以前に読んだ本とおなじではないかと思ひ乍ら下宿に帰って早速その本をとり出しノートと比べてみたら一言一句変らない。腹立たしくて……以後その講義は図書館に逃避した。」<sup>35)</sup>

同じく富樫は、一般論として書く。「当時は、大正デモクラシーはなやかな、

33) 徳橋の稿、小樽高等商業学校大正十三年卒業『五十周年記念文集』

34) John Stuart Mill (1806~1873) イギリスの経済学者、哲学者、思想家。

35) 能村敏治(『坂の道』) 85ページ。

政治・経済・社会に互る思想と学問の躍動する画期的な時代であった。青年学徒にとっても自由の天地のひらかれた感ある、明るい新鮮さに充ちた環境のなかで学生生活をエンジョイ出来たまことに恵まれた時期であった。」<sup>36)</sup>

これらの回想は間違いではないのだが、普通一般の学生の一側面を、山田季郎が書いている。気ばらないで、そして控え目に、である。これはかなり正直なのではないか。よく読むと少し批判的である。どんなよい学校でも普通の学生がおり、それはどこでもいつでもそうであろう。その側面も彼は語る。

「高等商業学校は、高等と名のるからには、商業に関する高級な学問だけを教えてくれるところだろうと期待するが、実際の教科は必ずしもそうばかりではなかった。もちろん吾々が高級な学問と信じていた経済原論、会計学、財政学、金融論などというものも、教えられるはずだが、それはもう少し後のことで、さしあたっての吾々の教科は、そろばん、簿記、商事要綱、習字、算術、商品学、工学などという、考えたり味わったりする学問よりも、むしろ覚えることに重点のおかれた学科の方が多かった。」「秀才と呼ばれたものは……この……覚えるという作業を軽がるとやってのけたが、かなり多くのものは、この覚えるという作業に倦んでいたのか、或は過重であるかして、次第に逃避をはじめていった。」この指摘は、当時の日本の教育に、また現在の日本の学校教育にもあてはまる。普通の高商生の行動も理解できる。さて、向学心に燃えて来た意気込みを持続しないで、いつしか学生くずれをしてしまったものは、上級の2年にも3年にもいた。「当時、マルクスの経済学もその革命理論も、まだそしゃく不十分で、吾々のところまで浸透してくるほど一般的でなかったし、まして非合法化扱いされていた革命運動などには、ノンポリの群は「全く無縁であったし、その温床にもならなかった。ただただ青春のはけ口を求め、学生生活を謳歌すると称して、昼となく夜となく、緑が丘の坂を登り下りした。」秀才は小数派であった、彼らが多数派であった。<sup>37)</sup>

手嶋恒二郎は、1906年（明治39年）宮城県に生まれた。1918（大正7）年

36) 富樫，同。

37) 山田，同。

に仙台商業学校に入学し、1923（大正12）年に卒業し、1924（大正13）年に小樽高商に入学した。ちょうど多喜二が卒業した年だった。彼は、翌年＝1925年の小樽高商軍教事件に関わった。2年生の時であった。1927（昭和2）年に高商を卒業し、数年後、千代田火災保険会社に入り、戦後に社長になった。

「あの頃勉学のために北海道に渡って来る内地からの学生というと、そのほとんどが例外なく持っていた石川啄木の歌集、そしてその歌集は、そうそう、大体は例の草色の布表紙の文庫本」、そして、「あの小樽の学校に浸透していた、ちょっとほかでは見られないと思われるおおらかな、それでいていつも情熱をたたえて絶ゆることのない独得の校風」<sup>38)</sup>と、手嶋は思い起こす。

## 6 時代の中の高商

手嶋は書く。<sup>39)</sup>

あの時代は、世の中の人々の心を右に左に動揺させるための舞台装置としては欠けるもののない多様性を持った時期であった。第一、昭和の初期といえば、世界的大不況のなかに呼びこまれて、日本もそのどん底にあった。倒産者が相次ぎ、失業者が多くなり、国の全体がやがてはじまる長い暗黒時代に向かっての前駆症状を形成していった。小樽の当時の実相のなかには、そうした全国的風潮を、とくに象徴的にあらわしているものがあつた。

激しい無政府主義者の活動、それに押さえられた一連の社会主義団体の反発、全国的に見ても他の町ではあまり見ることのできなかつた x x 人<sup>40)</sup> 団体の政治的地下活動、いろいろな形と色合いの政治的運動の展開のなかにあつて、ひときわしずかに深くしみ込んでいった思潮、小樽に限ったものではなかつたが、あの町に殊更に目立って成長していった思潮、それは自由主義であつた。

38) 久城壽右衛門編『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』保険研究所 昭和56年。

39) 文章は、余分な句を省いて、ここで利用する。

40) 多分、朝鮮と入る。



高等商業という学校は、我国の資本主義経済の発展のための必要から全国的に設立された施設である。資本主義体制下の企業の経営上必要な事務的技術を身につけた者を養成するためのもの〔である〕。

有名なヒルファディング<sup>41)</sup>の書いた書物に「金融資本論」<sup>42)</sup>というのがある。その中にはサラリーマンに関する一節がある<sup>43)</sup>。一連の実業学校というのは、いみじくもあそこに書かれているような性格のサラリーマンをつくるための学校である。だから我が小樽高商の学生として身につけるべき本来の義務と目的といえ、前述のような本旨に添うものでなければならなかった。事実、当時の学校としての正規の教程に盛り込まれているものは、すべてそういう主旨のものであった。

ところで、どうも私〔=手島〕の在籍した当時の小樽の学校内の空気は、その教程そのものは前記の通りであったのに、さて学内に流れていた空気は、どうしてああも桁はずれで、いわゆる「国家主義」的なものからは遠いのであったのか。それはつまり、当時の日本国内に流れはじめていた、そして北海道では特に急進的であった自由主義思潮の浸透があったからであろう。そういう背景のもとでの、そうした思想的のものが私の学んだ小樽の学校内の空気を特別に彩色していたのだ。

そうした実状を明らかにするための材料として、当時我々が使わせられた教材のことなどを取り上げるが、むろん商業専門校であるから、それにふさわし

- 
- 41) Rudolf Hilferding (Wien 1877~Paris 1941)。『金融資本論』の著者として有名。オーストリアそしてドイツの社会民主党員・経済学者。中期に、「組織された資本主義」論などを唱え、ドイツ社会民主党を理論的に指導した。後期主著として『ドイツ経済批判』、「歴史的問題」など書く。前半の伝記として、拙書『若きヒルファディング』(丘書房 1984年)を見よ。全体として、Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hiferding*, Berlin 1962. 翻訳『ヒルファディング』ミネルヴァ書房 1973年。[研究]黒滝正昭『ルードルフ・ヒルファデーディングの理論的遺産』近代文芸社 1994年。
- 42) *Das Finanzkapital*, Wien 1910. この研究として、さしあたり拙書『金融資本論の成立』(青木書店 1975年)を見よ。
- 43) 『金融資本論』第5編を見よ。

い科目は一杯あった。法律学、簿記学、商品学、そして会計学という風に一応はみんな揃ってはいた。ところがそれらの学科のもつ或いはそれらが学内でみんなから受ける、ムードとでもいったらよいか、そういう点について、これを他の学科に比較してみると一段も二段も低いのであった。ほかのもろもろの学科、すなわち一連の語学、経済学、経済思想史、哲学……であるが、そういう種類のものの方が遥かに広く人気があった。そして例えば、英語ばかりではなく、独逸語でも仏語でも露語の場合でも、用いられる書籍というと固いものはほとんどなく、文学的のものが大半であった。例えば英語で、キーツ<sup>44)</sup>も、トマス・ハーディ<sup>45)</sup>も知ったし、スチブソン<sup>46)</sup>も随筆にいたるまで、ともかく恰も文科の学生でもあるかのように読まされたものであった。

M [蒔田栄一である] という若い英語の先生がいたが、上田敏の『海潮音』の講義が得意で、我々はあれもこれもと暗唱させられた。その先生、どうかするとボヘミアン・ネクタイを締めてやってきて、それを春風になびかせながら、緑の丘をいとも得意そうにそぞろ歩きしていた。なんとも商業学校らしいものでなかった。ともかくも一風変わった小樽高商というものであった。といって、本物の真面目な、つまり会社向き、銀行向き、商社向き、そして先生向きといった勉強家も実は沢山居ったし、またそういう学生を指導する立派な教授方も多くいた。

なんとも目だつほどの文化的などという雰囲気のにかに豊かであったことか。

後年あの学校の卒業者のなかから伊藤整とか、小林多喜二とか、その他の名のある一種独得な個性のある数多くの芸術家のあらわれた理由は、当時のあの学校内に流れていた色彩豊かな環境にあったのではないか。

例えば経済学について、教科書にジョン・スチュアート・ミルの原書を用い

44) John Keats (1795~1821). イギリスの詩人。

45) Thomas Hardy (1840~1928). イギリスの詩人、小説家。

46) Robert Louis Stevenson (1850~94). イギリスの小説家、詩人。『宝島』で有名。

た当時の高商では、まずもってどこでもそうであったから、小樽においても同様であった。当時の複雑な時流を背景として、いわゆるマルクス主義経済論なるものが次第次第に多くの人びとの心を捉えていった。

あの小樽高商の当時には、いわゆる経済学という部門にあっても、かなり秀れた若い学問の徒が、激しく心身をすりへらしていた。一体どうしてあんな北僻の地に、どこからみても好んで赴任する気持ちになど絶対になりそうもない土地であったのに、あのような立派な若い学者たちがどうしてあかも集まったのだろうか。初代の校長であった渡辺先生の並々ならぬ努力の賜であった。その渡辺先生は、人間の集団を正しい規律ある団体にまとめ上げ、そしてこれに狂いのない目標をいろいろ与え、しかもその目標に向かっては不断に情熱をたぎらせて止どまることを知らぬように仕向けてゆくという、真に深い強い立派な見識、哲学を持っていられた。だからして万事はそういうお人の秀れた指導力によるものであった。

ともかくもそのような立派な校長のもとで体系づけられた如何にも確かな資本主義経済学の教程ではあったが、そうした一連の古典経済学の研究は、小樽という学校においても、研究的ムードとしては次第次第に力を失って行き、これに代わっていわゆる「社会の構成と変革の過程」<sup>47)</sup>を追求するための経済学、つまり反資本主義経済学が華々しく広がっていった……

だから、そういう傾向のなかで我々が使わされた教科書の中には、例えばカウツキー<sup>48)</sup>などの原書が登場した。

ヒルハー [ママ] ディングの金融資本論とか、ニコライ・レーニンの帝国主義論とか、ヘーゲル<sup>49)</sup>やフォイエルバッハ<sup>50)</sup>の研究とか、タールハイマー<sup>51)</sup>

---

47) もちろん、これは一世を風靡した有名な福本和夫(1894~1983)の主著の題である。彼は、一時期、共産党の理論的指導者だった。後述。

48) Karl Kautsky (1854~1938). ドイツ社会民主党の大知識人。マルクス派社会学者。初め左派、ついで中央派。

49) Hegel (1770~1831). ドイツの哲学者。弁証法を体系化した。

50) Feuerbach, Ludwig (1804~72). ドイツの哲学者。人間主義的近代唯物論を作った。

の史的唯物論とかの研究が、或は大衆討議の形式で、或はそれぞれの小さな研究グループの形式で、活発に進められていった……<sup>52)</sup>

[多喜二より] 1級上の萩原謙造は、原書でマルクスを読んでいた。彼は、東京商大を出て巣鴨高商で教えた。若くして病死した。多喜二の1年上にはニイチェ学者になった井上政次がいた。そして高商の学風を「下手な文科の専門学校」と評した。「大西先生の影響で、アカデミックな学問的雰囲気もみなぎっていた」<sup>53)</sup>。

しかしそう簡単ではない状況もある。大正13年の、学内弁論大会で、手嶋は「サラリーマン論」をやった。その日、弁論部長として出席していた苦米地英俊から、論旨開陳の中止を命ぜられ、あまつさえ、会が終わってから階下のピアノ室で散々油をしぼられた。その日、夜おそくなってようやく解放されて校門を出て来たら、今まで話もしたこともなかった学生が二人、手嶋のところへ走り寄ってきて、手を掴み“今日は本当にいい話を聞かせて戴いて”と感激をこめて手嶋の耳にささやいた。1人は秋田へ行ったF氏で、1人は商大の助教授になったI氏であった。<sup>54)</sup> 多分苦米地は、反動的な立場で手嶋をやっつけたのであろうし、演説中止とは、あたかも警官のようである。

伊藤整は、高商を、かなり皮肉に表現している。

[小樽の人々は、高商が] 明治初年のクラーク以来の札幌の北大に対抗する学問の府であるという、少し無理な確信を持っていた。この町では、高商の生徒といえ、質屋でも、待合でも、居酒屋でも、バーでも特別待遇をされた。高商はこの町の唯一の最高学府だった。<sup>55)</sup>

51) August Thalheimer (1884~1948)。ドイツ共産党中央委員。

52) 久城壽右衛門編『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』保険研究所 昭和56年。

53) 西川, 19ページ。

54) 手嶋。

55) 『伊藤整全集』第24巻300ページ。

## 7 伊藤 整

明治32年（1898年）、小樽は、函館について、第2の開港場になった。人口は6万だった。大正5年（1916年）に10万を越えた。大正11年（1922年）には、小樽市となり、人口が12万近くなり、同年、札幌が市となり、13万人であった。

大正3年（1914年）、つまり第1次大戦で、日本はドイツに宣戦を布告し、青島を占領した。大正4年（1915年）から、輸出が伸びて、日本経済は好況になった。大正5年（1916年）から9年（1920年）まで、物価は暴騰した。大正7年（1918年）の夏に米騒動が起きた。大正9年（1920年）に戦後恐慌が起き、日本初のメーデーが行われた。小樽では、戦後不況から港湾労働者を中心として労働運動も次第に激しくなりそうになった。大正11年（1922年）にワシントン会議（軍縮会議）が開かれた。

大正6年（1917年）4月、伊藤整は小樽中学に入学した。この出身者には、作家の岡田三郎<sup>56)</sup>、画家の平沢貞通<sup>57)</sup>、脚本家の八田尚之<sup>58)</sup>、学者の中屋健一<sup>59)</sup>などがいる。整は、緑町の小林家に下宿した。上級生・小林北一郎と一緒に住み、彼は庁商に通っていた。ここは北一郎の親戚であった。整はここには1年半いた。その後、姉の照と一緒に部屋を借りて、自炊生活をした。大正8年（1919年）7月、中学3年の夏に、余市と中央小樽間に通学列車が運転されることになった。整はそのときから、自宅・塩谷からこれで通学した。朝は1本しかなく、帰りは小樽を3時15分、4時40分にでる2本ぐらいしかなかった。列車は20分ほどかかった。<sup>60)</sup>

56) 岡田。1890（明治23）年～1954（昭和29）年。松前に生まれる。早大卒。『文章世界』の編集をする。大正14年、『文芸日本』を主宰。作『伸六行状記』（昭和15年）。

57) 拙稿「小林多喜二伝——多喜二、庁商へ——」『人文研究』87しゅう、135ページ。

58) 八田尚之。小樽生まれ、明治大へ。劇作家。妻は宝生あや子。

59) 1910（明治43）年～1987（昭和62）年。アメリカ史研究家。東大教授。

60) 曾根博義『評伝 伊藤整』六興出版 1977年。

通学列車で、上級生鈴木重道が整に『藤村詩集』を貸し、整はこれに熱中した。整の詩作の始まりであった。整は、豊島與志雄訳『レ・ミゼラブル』を読んで感激もした。川崎昇は、小樽の貯金局につとめていて、歌をつくっていた。伊藤より2つ上で、伊藤が高商に入って1年たった頃、知り合った、と桶谷は言い<sup>61)</sup>、伊藤は『若い詩人の肖像』でも書く。しかし実際はもっと早かった。この川崎と出会ったことが、整の文学の出発にとって大きかった。

整は小樽中学へ、多喜二は庁商へ入ったが、樽中と庁商の生徒の間には、激しい対抗意識があって、スポーツの試合のとき等は小ぜりあいगतえず、相手の寄宿舎に殴り込みをかけたたり、決闘を申し込んだりする事件まで起きて、教師たちはいつも頭を悩ましていた。<sup>62)</sup>

「商業学校が中学よりも入るのに難しかったのは、小樽に限ったことでなく、大正初期の全国的な傾向であった。」<sup>63)</sup>

整が小林多喜二という名前を最初に記憶したのは、高商に入る前、小樽中学の4年生のときであった。『中央文学』という文学愛好者の投書雑誌の詩の欄に、小林多喜二の『春』という八行一聯の短い詩が掲載され<sup>64)</sup>、選者の三木露風がほめていた。小林多喜二の詩が、三木露風のいわゆる“観念的象徴詩”の稚拙で素朴な模倣による叙情詩であることがわかった。伊藤整もその『中央文学』という雑誌に二度投稿して、一度は大正9年(1920年)12月号で選外佳作欄に名前だけが、二度目には四行の短い詩が投書欄の尻尾に載ったことがあった<sup>65)</sup>。桶谷は云う。だがそれをきっかけに投書をやめた。それがたいへん安易で、つまらないことのように思われたからである、と。<sup>66)</sup>

そのころ文壇では、明治以来の作家がようやく背景に退いて、大正の新しい作家たちがはなやかな活動を開始していた。有島武郎、志賀直哉、武者小路実

61) 桶谷秀昭『伊藤整』新潮社 1994年37ページ。

62) 曾根博義。

63) 桶谷秀昭, 12ページ。

64) 桶谷秀昭, 10ページ。 ; 既出。

65) 載ったとされるが、現物が無いのでわからない、と曾根博義。

66) 桶谷秀昭, 11ページ。

篤らの白樺派、佐藤春夫、谷崎潤一郎などの唯美作家、広津和郎、葛西善蔵らの『奇蹟』の人々、『新思潮』系の山本有三、豊島與志雄、その後輩の芥川竜之介、菊池寛、久米正雄、宇野浩二、久保田万太郎、室生犀星などである。<sup>67)</sup>

通学する多喜二を、整が毎日見ている。整は、多喜二がいばっているように見えたが、桶谷は、多喜二には、毎日の労働による疲労にへこたれまいとする覇気が、おのずからその表情にあらわれたのであろう、と見る。<sup>68)</sup>

明治政府は、北海道に高等学校を作らなかった。小樽高商は、北海道でただひとつの文科系官立専門学校であった。地元の北海道出身者が三分の一くらいで、あとは全国各地からの学生で占められた。多喜二が高商に入学し、一年後、整が高商に入った。入学した伊藤は、高商本館の廊下で多喜二を見た。

「私（=整）はまたその階段廊下を上って、本屋の正面の方の教室へ行かうとしてリノリウムの廊下を左へ曲った。すると向うから、髪を伸ばして七三に分けた小柄な生徒が、青白い細面の顔に、落ち着いた、少し横柄な表情を浮かべ、廊下の真中を、心持ち爪先を開いて、自分を押し出すように歩いて来た。

その時、私はハッとした表情をしたにちがひなかった。小林多喜二といふ名がすぐ私の頭に浮んだからである。その生徒は、私を知らなかったが、私の表情には気がついたやうであった。なぜなら、彼の方は、見知らぬ他人に自分を覚えられている人間のする、あの「オレは小林だが、オレは君を知らないよ」といふ表情をしたからである。」<sup>69)</sup>

『若い詩人の肖像』では、伊藤 整は、多喜二と高浜年尾が中心になっている『校友会々誌』の編集部には近づかず、入学して間もなく原稿募集のビラが張り出されたが、それに応じようとする自分の衝動を抑えた、と書いた。だが、事実はこれに反している。大正11年（1922年）6月3日、『校友会々誌』第25号、整の入学後初めて出た号で、整の詩「春小曲」がちゃんと載っている。<sup>70)</sup>

67) 曾根博義。

68) 桶谷秀昭, 12ページ。

69) 伊藤『若い詩人の肖像』

70) 曾根博義, 176ページ。

桶谷は云う。伊藤整は、「春日」(=「春小曲」)という詩を校友会誌に投稿した。それは一段組で掲載された。伊藤整がその詩を「高商の校友会誌に投稿したのは、その機関誌の文芸欄を牛耳っているらしい文学青年たちへの対抗意識からであった。その中には、高浜虚子の子息で高浜年尾という二年生が俳句を発表していた。しかし伊藤がもっと気にしていたのは、校友会誌の『悩み』という、ポオの『ウィリアム・ウィルスン』から着想を得たらしい、一種の“分身”を主題にした短編小説を発表している小林多喜二という二年生であった。そしてその短編小説には、ポオのデカダンスよりは、修身の匂ひのする作者の母親にたいする孝心が感じられた。」<sup>71)</sup>

整のこの投稿で、多喜二は整の存在を知ったのだろう。整は云う。「そのころ多喜二は私を見覚えた。つまり私が、おとなしそうな一年生の私が、詩を書く人間であることを誰からか聞き、しかもどうやら前々から見たことのある顔だと思い出したらしい。そして出逢うと、やあ、という声をかけ、大変人なつっこい笑い方をした。」

一方、整は、多喜二を、切れながの眼に、ひどく打ち沈んで、ほとんど外界の何も見ていないような瞳の、多喜二と見る。<sup>72)</sup> 整は、高商図書館をよく利用した。小林多喜二も高商の図書館によく来ていた。

## 8 大熊信行

大正期の小樽高商教授陣で、学内外に最も名を知られたのは、『囚はれたる経済学』(大正2年)を弱冠27才で出した大西猪之介だった。大西の文章は、大正初期の経済学者のある種のしゃれたスタイルであった。<sup>73)</sup> 大西猪之介は、すでに経済学ですでに一家をなす見識を備えていた。<sup>74)</sup>

71) 桶谷秀昭, 10ページ。

72) 同, 14ページ。

73) 同, 16ページ。

74) 同, 15ページ。



大熊信行は、大正10年（1921年）4月、小林多喜二が入学した年に、小樽高商に赴任した若い経済学の教師であった。東京商大の研究科で福田徳三のゼミナリストとして、「カアライル、ラスキン、モリスの比較研究」<sup>75)</sup>を主題とした論文を出し、福田の推薦で小樽高商に来た。彼は美青年で、風采はダンディであった。だが大熊は、大西にくらべれば、まだ無名の経済学徒にひとしかった。<sup>76)</sup>

小林北一郎も、高商で大西に心酔し、大熊にひきつけられた。整は中学時代、汽車通学をするようになってからも、時々、北一郎のところへ遊びに行った。その時、高商にいた北一郎の本棚に、福田徳三、山川均<sup>77)</sup>、レーニン、トロツキー<sup>78)</sup>、ブハーリン<sup>79)</sup>、大杉栄、クロポトキンなどの本が並んでいた。<sup>80)</sup>彼は中学3年くらいだった整に、プロレタリアとブルジョアという言葉と意味を教えた。伊藤は、小林北一郎から、大熊の名をすでに聞かされていた。大熊が小樽にきたのは、北一郎が3年になった時だった。北一郎は大熊講師と特別に親しくした。

大正11年（1922年）4月から大熊は、亡くなった大西のあとをついで、経済原論の講義を担当することになった。初めの年は原書購読だった。だからそれは第2年目である。2年生向けであるから、2年生の多喜二がこれを受講した。整はまだ受講していない。

---

75) Carlyle (1795~1881). イギリスの評論家。

Ruskin, John (1819~1900). イギリスの批評家。

Morris, William (1834~96). イギリスの詩人、工芸家。研] 小野二郎『ウィリアム・モリス』中公文庫 1992年。

76) 桶谷, 16ページ。

77) 山川均 (1880~1958)。同志社大中退。不敬罪で投獄。1906年、日本社会党結成に加わる。日刊『平民新聞』編集に加わる。赤旗事件で投獄。境の売文社に入る。雑誌『新社会』編集。1920年、日本社会主義同盟の結成に加わる。1922年、日本共産党創立に参画。その当時の理論的指導者となる、同8月、「無産階級運動の方向転換」を出し、山川イズムといわれる。1923年、第1次共産党事件で起訴され、解党を主張した。

78) Trotzki (1879~1940)。

79) Bucharin (1888~1838)。ソ連の政治家・思想家。

80) 曾根。

大熊信行は、明治26年（1893年）、山形県米沢市に生まれた。13才のとき、県視学官だった父を失い、母は文学好きの人だった。米沢中学5年の時、啄木の影響で短歌を作り始めた。明治45年（1912年）、東京高商に入学した。土岐哀果に知られ、『生活と芸術』に歌を出した。大熊は社会主義に関心を抱いた。東京高商ではその学科に関心がもてず、短歌を書き続けていた。卒業して会社に勤めたが、文学をやりたいと思い、辞めた。その後、米沢市立商業の教諭になった。そしてまた文学でなく、なにか科学をやりたいと思い、一橋へ戻った。福田徳三のゼミにいられてもらい、「カアライル、ラスキン、モリスの比較研究」をした。福田は大正8年（1919年）に東京高商に復帰していた。

福田は、明治7年（1874年）に、東京の神田で、刀剣商の子として生まれた。洗礼をうけている。東京高商予科にすすみ、本科卒業後、学校に残った。明治31年（1898年）にドイツに留学し、ブレンターノ<sup>81)</sup>のもとで、経済学と社会政策学を学んだ。彼は吉野作造と「黎明会」を作った。彼は、東京高商の校長に椅子を投げるような喧嘩をし、そこを去り、一時慶応で教え、その後戻り、昭和5年に死んだ。

大熊は書く。「小林多喜二が、あそびにくるようになったのは、二年生のときである。その年、わたしは小樽の学校で、二年の経済原論をはじめてうけもった。わたしが小樽に赴任したのは、多喜二が入学したのと、いっしょだった。多喜二の名まえを、一、二度きいていたのだが、学校の廊下で、つかまって、小説の原稿だったか、雑誌だったかを、わたされたのが、顔をあわせたはじめだとおもう。雑誌だとすれば、かれの小説が当選している文章倶楽部だったにちがいない。／それから多喜二は、おりおりあそびにくるようになった。私が多喜二を好いたのは、かれがちっとも文学青年のくさみをもたないことだった。」<sup>82)</sup>

大熊は、多喜二が校友会誌に発表する小説のよみ役であった。多喜二はまた大熊の下宿に訪ねて行って、「カラムアゾフの兄弟」の思想について話を聞い

81) Brentano, Lujo (1844~1931). ドイツの経済学者。

82) 大熊信行『ある経済学者の死生観』論創社 1993年 31ページ。

たりした。伊藤は、多喜二と大熊に近づかなかった。

小樽の学校に文学をやる生徒が、わりに多かった。わけでも多喜二より一年うえの三年生に多かった。その仲間を大熊は好かなかった。きざな気がした。「小林多喜二は、ひとりまったくちがっていた。快活で、瞬間といえども、くそまじめな顔をせず、深刻がった表情をせず、白い歯をだして、たえず、わらい、本心がわからないほど、機嫌がよかった。」「ただいちど、多喜二の顔から、上機嫌な笑みがきえたのを見たのは、わたしのところへあそびにきているあいだに来あわせたひとりの一年生（板垣君といった）と意見がぶつかった数分間である。ふたりの学生は、漱石の『文学論』がおもしろいとか、おもしろくないとかいうことで、ひどくいいあらそった。わたしはだまってきいているだけだった。」<sup>83)</sup>一年上の能村敏治も、「多喜二君と連れだって大熊先生を訪ねた」と言う。<sup>84)</sup>

伊藤整の、講義室での大熊と小林の会談の有名な描写については、大熊は、大正十一年（1922年）の秋から冬にかけてのことで、伊藤整が一年生のときの記憶ちがいではないか、と云っている。<sup>85)</sup>これは正しい。それにそれは、記憶違いでなく、整がわざとねつ造した可能性がある。

大正十一年（1922年）十月を、大熊は忘れがたい記憶として抱いていた。大熊は大正十一年十月から大正一二年（1923年）六月にかけて、経済学の価値論に憑かれていたのである。教場で、小林多喜二と文学論の私談をするようなことはありえず、またその記憶もない、と大熊はいう。<sup>86)</sup>

大熊は経済原論の授業ために経済価値論について考えぬいたが、それを大正11年（1922年）の秋に書いた。<sup>87)</sup>

大熊はその内容について自ら語る。「その書いた論文『生産力配分の原理』

---

83) 同, 32ページ。

84) 能村敏治の稿（『坂の道』）85ページ。

85) 桶谷秀昭, 30ページ。

86) 同, 30～31ページ。

87) 大熊「経済学的回想 3」12ページ。

88) 現在では、利用でなく、効用。

一九二二年] というのは、主観学派の価値論である限界利用<sup>89)</sup>均等法則を使って、しかも、労働の配分を説明するというものです。おもしろいのは、この最初の理論経済学の論文で数式を使っているということです。知っている数学は三角までで、曲線を使えない。それでやむをえず直線で図をかいた。そうしているうちに、『おッ？ これは何だ。何だこれは？ 労働価値説と限界利用均等法則を一緒にやっている。』ということに気づくわけです。まるで、一つのもの裏表のようにやっている。二つの学理が矛盾するどころか、合わせて一本となっている。

ことのわけは、小泉信三<sup>89)</sup>流の、つまりジェヴォンズ<sup>90)</sup>流の『労働の苦痛』という考え方を全部排除しちゃったからなんです。労働というものを、あくまでも時間的な『量』の観念にもどした。古典派と同じようにね。しかし、古典派と違うところは、わたしは限界利用均等法則という、新しい学理を使っている。主観学派では、この学理を貨幣に使っているわけでしょ。わたしは、この学理を労働時間にあてはめるわけです。一人の孤立人の総労働時間をいかに合理的に配分するかという問題の解決にこの学理を使ったものだからね。ヒナ型ではあるけれども、労働価値の学理と限界利用均等法則という基礎法則が裏表の関係になっている。労働価値説の基本に、この限界利用の法則がはたらいていないと考えなければ説明がつかない。いいかえれば、使用価値に関する法則が基本にはたらいてはじめて労働価値（交換価値）というものが成り立つ。古典派からマルクス学派は、使用価値を前提としてあっても分析しなければなんとは考えない。それを分析した新しい学派の業績をそっくりもってきて、古典派の学理と全然何の矛盾もなく一緒に組み合わせたわけです。それで、今度は、

89) 慶応義塾大学の経済学の教授。

90) William Stanley Jevons (1835~82). 限界効用理論の確立者の1人。

イギリスの経済学者。

91) [大熊]「<一通の手紙>郷里に病む」[大正13年] 8月4日、大熊の木村荘五あて手紙。(『大熊信行研究』第五号, 1981年12月20日)。「一昨年の秋の仕事だった経済純理の論文……」(1ページ)。; 大熊信行「経済学的回想 3」(『大熊信行研究』第参号, 1980年10月20日)「その論文を書いたその年(大正十一年)……」(13ページ)。

自分でびっくりしたわけです。」<sup>91)</sup>

大熊が書いた草稿は、「生産力配分の原理」であった。100枚近い論文だった。そのエッセンスを40枚くらいに書いて、昭和2年(1927年)十一月に、東京商科大学の『商学研究』七ノ二、に載せた。

佐々木妙二は、小樽時代の大熊信行について思い出す。

大熊先生を宿にお訪ねしたのは、多喜二に連れて行ってもらったんです。そのころ、先生は私どもの教授でもあり、とても偉く思われて、多喜二に連れて行かれたから行ったようなものです。<sup>92)</sup> その時に、先生が紅茶をごちそうしてくれたんですが、どうしたわけか、お砂糖の入らない紅茶なんです。それが非常に強く印象に残っています。宿にお訪ねしたのはその一度きりで、あとは学校です。・わたしは校友会誌の編集部の仕事をしておりましたが、それで時おりお目にかかりました。「アダム・スミスの漫画化」<sup>93)</sup> というのは、わたしが、そのころ校友会誌に載せるため先生からいただいた原稿です。

先生はそのころ、講義に和服を着ていらした……品物も非常にいい和服だったと思うんですが、黒板に字を書く時に、品物がいいものですから袖がくるくるまわって滑ってくるんです……ぼくもまねして、小樽高商時代は和服で通して、黒い袴をはいてました。大熊先生は美男子でしたから、「先生、ダグラス<sup>94)</sup> に似ていますね。」と言ったら、「うん、田舎まわりのダグラスにだな。」なんて言ってました。

そのころから、わたしが歌をやっている、先生に見ていただいたりした……先生はそのころ口語歌を作っておられて<sup>95)</sup>、見せてもらった……。大正一二年頃ですか。何かの雑誌に出したものを見せられたと記憶しています<sup>96)</sup>。非常にロマンチックな口語歌でした。

ぼくが二年の時に体をこわして休学して田舎にもどったんですが、休学して

---

92) そこで佐々木は、自分が多喜二の一年下であることを力説している。

93) 大熊の『社会思想家としてラスキンとモリス』に入ったと、いう。

94) ダグラス・フェアバンクスのことだろう。アメリカの映画俳優。

95) この頃、大熊が歌を作っていたのではなくて、昔作っていたのであろう。

96) 大熊の全歌集『母の手』に入っている、という。

いる間に多喜二も伊藤整も卒業し、先生も南湖院の方に行かれ、結局、小樽を退職されるわけです。<sup>97)</sup> ……

一方、その大熊が、自分の小樽時代の思い出を書く。

「小樽は自分にとって何であつたのであろうか。わたしがそこにいたのは大正十年四月から同十二年六月までに過ぎない。籍を失つたのが同十四年三月で、在任期間の半分は病気休職であつた。

わたしの担当は一年の原書講読、三年のプロゼミのような小さいクラスのこれまた原書講読であつた。後者ではゴンナー版のリカアド<sup>98)</sup>をあてがわれた。が、一年かかつても第一章を読み切れなかつたのに、学生の間から不平のでなかつたのは、いま思つても不思議である。

わたしはリカアドと平行して、キヤナン版のスミスをはじめて小樽で読んだ。一橋の学生時代のテーマは社会思想であるから、厳密にいうと経済理論のわたしの出発点は、東京でなくて小樽である。東京の学生時代には、ひそかに小泉信三訳のジエボンス一冊をこなしたに過ぎない。小樽はわたしにとって、表面上教員時代のはじめにちがいないが、実質的には学生時代の延長、その継続であつた。たゞ何も知らず教員をしているという恐怖が、否応なしにわたしを謙虚にしたと思う。当時の小樽高商は、大西王国時代の頂点にあつた。わたしは就任早々、大西教授から厚遇をうけた。英人教師ジョーンズから招待を受けたが、妻の代わりに君を連れて行く、と言われてビックリした覚えがある。その時の野菜サラダのうまかつたこと。いま一つ先輩、同僚の椎名幾三郎の友情も忘れがたい。テニスやスキーも、いま思へばかれの手ほどきでないものはない。しかし当時の小樽の学生が、わたしには学生というものの永遠の理想像である。その学問的雰囲気、知的欲求と情熱。教師に対する善意の好奇心や期待など、それは若い教師の心をしめつけずにはおかないものであつた。新任の

97) 佐々木妙二『『まるめら』の主宰者』（『大熊信行研究』第参号、大熊信行研究会1980年10月20日発行、論創社）

98) David Ricardo (1772~1823). 古典経済学を完成した。イギリスの経済学者。主著は『経済学と課税の原理』1817年。

若い教師を質問せめてテストする位の意欲があり、かれらの眼はかがやいていた。小樽には二年半もいなかった。しかし、小樽での思い出といえば、十のうち九までが、学生たちと結びついている。小説「暖流」<sup>99)</sup>の主人公が小樽高商出とあつてみると、その在学がたまたま私の在任時代と重なっていることさえ、計算しないではいられない。小林多喜二のものはともあれ、伊藤整の諸作ともなれば、くり返して今も読む。

大西教授の急逝から、にわか二年目から原論を担当し、重荷にたえかねて病気になった、といへば少しウソになるが、原論の講義準備中にはからずも生みおとしたのが配分原理で、これが学者としての仕事の方向をきめてしまうことになった。小樽は自分にとって何であったのか。

それはたんに学校教師としての幸福の起点であつたのではなく、学者としてささやかな創造的活動の出発点であつたということを、書きおとすわけにいかない。」<sup>100)</sup>

高商時代の多喜二の文学について、大熊は論ずる。

「あたらしい世代の作家たるべきものが、まず志賀氏にまなぼうとしていたのは、意味のあることだとおもうのだが、わたしは小林多喜二の未来に、あたらしい世代の代表的作家たるべき運命がまっているだろうと想像したことは、いちどもない。当時のわたしの考えでは、(……)作家というものは、常人の経験しない生の深淵を足もとにふまえているべきはずのもので、かれ自身狂気そのものであってはならないが、狂気を内に抑えているものでなければならぬ。多喜二には、そうした「天才」のひらめきがなかった。ただ、創作の持続的衝動が、なかなかねばりづよく、作風は、武者小路ふうのイヒ・ロマンから遠い、客観的、写實的傾向に終始してい、題材は、町はずれの駄菓子屋の婆さんだとか、巡査だとか、およそ一見して作家自身から遠いところにみいだされ

99) 岸田国土の小説。

100) 大熊信行「かれらの眼はかがやいていた」(緑士会卒業四十周年記念文集『回顧』1962, 昭和37年12月28日)。印刷物から大熊本人が加筆訂正したテキストにもとづく。榊原氏提供。

た。あたかも多喜二は、えかきが絵をかくように小説をかいたが、うまれながらもってきた「思想」がなかった。かれは、まだ方向をあたえられずに、かけまわっている馬のようなものだった、……」<sup>101)</sup>

大熊は、もちろん、後年の多喜二と彼の文学を高く評価することにやぶさかではない。これは、高商時代の多喜二文学への評価であり、またこれはあまっている。彼のいう「天才のひらめき」は、多喜二にはなかった。ある意味では、後年の多喜二にもそれはなかった。多喜二文学はそういう種類とは違っている。

そして高商時代には「まだ方向があたえられず」にいたことは確かである。文学を内向型と外向型に分ければ、多喜二文学は外向型である。後年の夏目漱石に見られるように、心理描写をする内向型にたいして、多喜二は外界を描く。描く外界が意味があり、重大な場合には、小説が成功するだろう。彼が修業時代に選んだ外界は、売春問題であった。デビューするころから選んだ題材は、労働者運動である。時代と、彼の選んだ題材の衝撃性と、面白さとのために、彼は有名になり、作家として成功した。

## 9 友人たち

桶谷は書く。「はっきりいって多喜二は整が書いているほど整に身近にいた人間ではない。」<sup>102)</sup> その存在が、整にショックを与えたのは、高商の同学年生・鈴木信であった。

鈴木信は、旧会津藩士の子孫として明治36年（1903年）2月、余市<sup>103)</sup>に生まれた。彼らは会津戦争に敗れて余市に集団入植し、りんごの栽培に成功した。鈴木信は、余市高等小学校を卒業し、庁商に入学し、そこで多喜二の一級下だった。多喜二らのグループには加わらなかった。鈴木がマルクス主義にひかれる

101) 大熊, 33~34ページ。

102) 曾根博義, 187ページ。

103) 小樽から西へ20kmの隣町。



ようになったのは、庁商4年のころで、河上肇の著作を読んだのがきっかけだった。学校の授業には左翼的なものはなかった。河上の本や、『改造』、『解放』などの雑誌を通じて、マルクス主義に近づいた。彼は、野球部に入ってショートをやった。庁商5年の時、校長排斥運動<sup>104)</sup>のリーダーになった。多喜二が卒業し、新学期が始まると、ストライキや一週間の授業ボイコットが行われ、途中から5年生の鈴木信がリーダーになって、校長との交渉にあたった。校長は妥協して生徒の要求を受け入れたが、すぐに辞職したわけではなかった。この運動は左翼運動とは関係なかった。

小樽庁商で鈴木信と同級に寺田行雄がいた。寺田はそのころからマルクス主義をよく勉強し、鈴木より一年遅れて高商に入った。三年の時、軍教反対事件のリーダーの一人となって無期停学になった。鈴木は高商に入ってから野球を続け、東京で行われた全国高等専門学校大会にも2度出場した。ショートかレフトを守った。寺田は、卒業して「北海タイムス」の記者をやりながら、マルクス主義の研究会を開き、多くの人々に影響を与えた。新聞記者だったので、公然とした活動はせず、表面には出なかった。だが「この人を抜かしては当時小樽から出た左翼のインテリのことは語れないほど大きな影響力を持った」<sup>105)</sup>。

寺田は、鈴木信、小林多喜二の共通の友人であった。二人ともその感化を受けたが、寺田自身は、小樽商業時代、鈴木の影響を受けたと語った。

鈴木は、整と同じ大正14年(1925年)に高商を卒業し、秋田市立商業学校の教諭になった。彼は、余市の夏目三代と結婚した。彼は秋田で農民運動を応援した。そこで昭和4年、四・一六事件で逮捕され、1カ月勾留された。秋田商業の教師をつづけられなくなった鈴木は、上京し、野坂参三主宰の産業労働調査所に入った。

伊藤整が小林多喜二とはじめて口をきいたのは、外語劇のときであった。高商外語劇は、大正2年(1913年)以来のものだった。この時、デーゲンと外語出の高橋益実が指導した。伊藤は侍童で、小林は山羊に扮して、侍童の横に

---

104) 既述。

105) 曾根博義, 189ページ。

いたが、「鳥が傾いて見えては工合が悪い、自然に侍童の手にとまっているように見せねば」と小声で注意した。<sup>106)</sup> 高浜は犬になった。整は、この機会に楽屋や舞台上で多喜二と気軽に話せるようになった。

「年が明けて大正13年3月に出た校友会誌に、多喜二の小説『或る役割』が載った。語劇祭に題材を採った短編であり、主人公の高商生が、恋人に振られたあげく、『青い鳥』に好色な豚の役で出場して、ミチルを追い廻す。客席に恋人が来ている。彼は、酬悪な下品な役割に、自分の全人格がさらけ出されたと感じ、絶望的になる。この短編は風刺小説のようでありながら、主人公の内面描写が過度の自虐に傾いているために、風刺の効果としては失敗している。これは、多喜二がこの頃、ドストエフスキーをよんでいて、その影響をわるく受けているためではないかと思われる。しかしまた、それは、多喜二の中に根づよくある“修身”のためであろう。」<sup>107)</sup> (点を補った。)

「小説に興味をもたなかった伊藤整は、しかし、多喜二のこの小説だけは熟読した。ここに語劇祭の『青い鳥』の森の場面がかなりくわしく描かれていたからである。ひょっとして、エキストラであるとはいえ、自分のことが出てはしまいかという関心があったであろう。しかし、そのあてははずれて、もっぱら豚に扮した主人公の滑稽で酬悪な演技とその絶望的な自意識が、丹念に描かれていた。／その書き方はやや古風な自然主義小説を思わせるが、「なかなかうまいものだ」と思った。

ところで、伊藤整もまた、語劇祭に出場した自分の印象を『幕合』という題のややながい詩に書いている。」<sup>108)</sup> この詩は、高商の校友会誌、大正14年(1925年)2月に発表された。そのとき小林は、すでに1年前に卒業していた。

多喜二の卒業論文は、クロポトキンとストロの翻訳である。そのまえがきに、小文を書いた。そこにマーシャル<sup>109)</sup> やピグー<sup>110)</sup> の名が出て来る。

106) 桶谷秀昭, 51ページ。

107) 同, 51ページ。だが、女性問題を除けば、多喜二は、当時の人々のうちで、それほど修身にこだわっていない。

108) 同, 52ページ。

109) Alfred Marshall (1842~1924). イギリスの経済学者。

だが「アルフレッド・マアシャルの『経済学原理』の全訳が大塚金之助によって刊行されたのは昭和3年〔1928年〕であり、マアシャルの後継者ピグウの主著『厚生経済学』は、昭和28年〔1953年〕まで翻訳がない。」だから、多喜二は両書を読んでいないと見てよい。「マアシャルやピグウという、ケンブリッジの新古典派経済学者の名前を、多喜二は大熊信行の講義で知ったのであろう。その大熊信行から吹き込まれた耳学問を、小林多喜二は大切にしていた。」

「小林多喜二は、卒業論文に、はじめはヘルマン・ハインリヒ・ゴッセン<sup>110)</sup>をやるつもりであった。多喜二はドイツ語を知らないから、大正九年(1920年)に手塚寿郎が抄訳したゴッセンの『人間交通の発展並に是より生ずる人間行為の法則』に頼ろうとしたのであろう。」<sup>112)</sup>

ゴッセンは、1810年生まれのドイツ人で、主著は1854年に出た。しかし、それは黙殺されて、不遇のうちに死んだ。だが1870年代にオーストリア学派の経済学、カール・メンガー<sup>113)</sup>、ベーム・バウエルク<sup>114)</sup>の限界効用学派が、新しい価値論を提唱したとき、ゴッセンの名は一躍脚光を浴びることになった。ジェヴォンズやワルラス<sup>115)</sup>も、ゴッセンの名を知り、自分らの先駆者と認めた。<sup>116)</sup>

だが多喜二は、「自分の柄ではない」と思って、ゴッセンはやめた。桶谷は論ずる。「とくにイギリス派の経済学に抜きがたくあるベンタムの功利思想…は、小林多喜二でなくても、この頃の日本の青年に馴染みにくいものがあった。また限界効用学派の主観主義は、個人の消費享楽を動機にしているため、

110) A. C. Pigou (1877~1959). イギリスの経済学者。

111) Gossen (1810~58) 主著 1854年。

112) 桶谷秀昭, 55ページ。

113) Karl Menger (1840~1921). オーストリアの経済学者。限界効用理論確立者の1人。兄はアントン。

114) Eugen von Böhm-Bawerk (1851~1914). オーストリアの経済学者。

115) Léon Walras (1834~1910). フランス生まれ、スイスの経済学者。限界効用理論の確立者の1人。

116) 桶谷秀昭, 56ページ。

“修身”の倫理感覚を身につけている日本人に違和感を抱かせた。」<sup>117)</sup>

---

117) 桶谷秀昭。日本の経済学者・研究者は、ゆっくりではあるが、この主義を採りいれ始めた。

これは、高商史研究会の活動の一結果である。

訂正

『商学討究』45の1

54ページ(1) 筑摩書房 → 新潮社